

『念仏三昧宝王論』の撰述年代

——飛錫の事跡に関連して——

加藤 弘孝

〔抄録〕

唐代中期の飛錫が著した『念仏三昧宝王論』からは、浄土教、天台宗、禅宗、三階教などの諸思想が重層的に絡み合う特異な思想を見てとることができる。しかし飛錫が主題とした思想、教学は、必ずしも解明されておらず、先だって『宝王論』に見られる諸思想が互いにどのような意図をもって関連付けられたか考察する必要がある。その際、同時代の諸宗及び思想家達の動向を窺うことが最も重

要になってくる訳であるが、飛錫の『宝王論』の撰述年代はおろか活動年代に関しても、未だに定説を見ないのが現状である。そこで本稿では『宝王論』の撰述年代及び飛錫の事跡に関する記述を整理し考察していく。

キーワード 飛錫、不空、『念仏三昧宝王論』、安史の乱

はじめに

唐代中期の飛錫（生没年不詳）が著した『念仏三昧宝王論』（通称『宝王論』^①）からは、浄土教、天台宗、禅宗、三階教などの諸思想が重層的に絡み合う特異な思想を見てとることができる。現段階で飛錫が主題とした思想、教学は、必ずしも解明されておらず、先だって『宝王論』に見られる諸思想が互いにどのような意図をもって関連付けられたか考察する必要がある。その際、同時代の諸宗及び思想家達の動向を窺うこ

とが最も重要になってくる訳であるが、『宝王論』の撰述年代はおろか、飛錫の明確な活動年代、生存年代に関しても、未だに定説を見ないのが現状である。とりわけ大きな問題になってくるのは、『宝王論』の撰述年代が安史の乱以前か以後かというものである。飛錫が活動した唐代中期は、行政、経済、思想など多方面で、中国史における転換期であり、その転換には安史の乱が大きく作用しているとされる^②。もし『宝王論』が乱後に撰述されたものだとすれば、飛錫の思想は変革期の仏教思想という観点から研究されねばならず、多くの点での再考を余儀無くされる。

このように『宝王論』撰述年代を明確にすること、また併せて飛錫の詳細な事跡を確認することは、『宝王論』の思想解明のみならず、中国仏教史、浄土教理史研究にも関わる意義のある作業だと考えられる。そこで本稿では『宝王論』の撰述年代および、それに派生する飛錫の事跡に關わる記述を整理し考察していく。

第一 先行研究

『宝王論』の撰述年代について言及した先行研究には、次のようなものがあげられる。

- 佐々木月樵『支那浄土教史』上巻、無我山房、一九一三年。
- 矢吹慶輝『三階教之研究』岩波書店、一九二七年。
- 塚本善隆『唐中期の浄土教―特に法照禪師の研究―』(『東方文化学院京都研究所研究報告』第四冊) 東方文化学院京都研究所、一九三三年。
- 佐藤哲英『天台大師の研究―智顛の著作に關する基礎的研究―』百華苑、一九六一年。
- 中山正晃『飛錫の念仏三昧觀』(『印度学仏教学研究』第十七卷、第二号〔三四〕) 日本印度学仏教学会、一九六九年。
- 藤堂恭俊『震旦諸師の浄土教に關する著作 解題』(『浄土宗全書』第六卷) 山喜房佛書林、一九七三年。
- 唐中期仏教思想研究会「唐代中期仏教の研究」(『大正大学綜合佛敎研究所年報』第二三三号) 大正大学綜合佛敎研究所、二〇〇一年。
- 伊吹敦「念仏三昧宝王論に見る禪の動向」(『東洋学研究』第四一号) 東洋大学東洋学研究所、二〇〇四年。

佐々木月樵は『宝王論』に「唐紫閣山草堂寺沙門飛錫撰」の撰号があることから、長安に至った直後、すなわち草堂寺に住していた天宝年間(七四二―七五六)の頃の著作とみている(三二四頁)。

矢吹慶輝は『宝王論』に三階教の影響がみられることから、開元十三年(七二五)の三階教禁遏より大暦年間(七六六―七七九)の同教復興に至る間の著作とする(一〇四―一〇五頁、五七八―五八一頁)。

塚本善隆は飛錫の活動年代を、飛錫制作の碑文の成立年代を根拠に、三階教の復興期と重なる大暦年間(七六六―七七九)、貞元年間(七八五―八〇五)まで認め、『宝王論』の著述時期については、再び草堂寺に入った晩年時代だと推定する(一八六―一八九頁、二九九―三〇八頁)。

佐藤哲英は『浄土十疑論』の成立年代を考察する過程で、『宝王論』の成立について触れ、長安千福寺で法華三昧を始めた天宝三年(七四四)より三十年を経た大暦九年(七七四)前後の著作だと見做している。(六三五―六三八頁)。

中山正晃は大暦十三年(七七八)以後、再び紫閣山草堂寺に入り、伝道生活を送っていた晩年に撰述されたものと述べている。また同時に法照(生没年不詳)の五会念仏の影響を指摘する(三一〇―三二三頁)。

藤堂恭俊は佐藤哲英の説を受けて、大暦九年(七七四)以後、草堂寺において撰述されたと述べている(三―十一頁)。

唐中期仏教思想研究会は、『宝王論』は唐代中期、恐らく七五〇年前後に、撰述された典籍だとするが、その根拠は提示されていない(七二頁)。

伊吹敦は飛錫の生存年代を大よそ七一〇―七八〇年頃と推定し、安史の乱(七五五―七六三)以降、中国各地に広く展開した人間中心の思想

潮流を、復興期の三階教徒や馬祖道一（七〇九―七八八）らと共に飛錫が共有し、それを『宝王論』に反映させていたことを主張する（一三六―一四〇頁）。

これらの論稿は、『宝王論』本文中に出る同時代に比定し得る思想や『宝王論』「序文」の記述、また飛錫の行状などを典拠としている。何れも唐代中期の著述とする点では共通しているが、導き出された成立年代は、天宝年間（七四二―七五六）から貞元年間（七八五―八〇五）までの期間であり、一様ではない。これは飛錫の事跡そのものが、明確でないところに起因していると考えられる。よって飛錫の事跡に関する記述を整理した上で、『宝王論』の撰述年代について考察していきたいと思う。

第二 飛錫の事跡

（一）修学、訳経時代の飛錫

飛錫の出生、修学については定かではなく、飛錫の時代より二百年以上、下る史料である賛寧（九一九―一〇〇二）の『宋高僧伝』卷三「唐大聖千福寺飛錫伝」に、

釋飛錫、未知何許人也。神氣高邁、識量過人。初學律儀、後於天台法門一心三觀、與沙門楚金棲心研習。天寶初遊于京闕、多止終南紫閣峯草堂寺^③。

とあるのみである。初めに律儀を学び、後に天台法門、一心三觀を楚金（六九八―七五八）と共に研習したという。長安に至ったのは、天寶の初め（七四二―）であり、多く草堂寺に止まった。楚金との関係についての記述は、天寶十一年（七五二）成立の『大唐西京千福寺多宝仏塔

感応碑文』（通称『千福寺多宝塔碑』）に、天寶三年（七四四）、楚金が千福寺に法華道場を設置した際、四十九人の同行大徳の一人に選ばれて、共に法華三昧を行じたと記されているのが初出である^④。

その後、飛錫の活動が確認できるのは、広徳年間（七六三―七六四）である。『請置大興善寺大徳四十九員』勅一首には、

定國寺僧懷感。含光。法誠。慧遠。元皎。東都敬愛寺僧乘如。超度。勝業寺僧通幽、見充上座。僧慧靈、見充寺主。鳳翔府標覺寺僧深照、見充都維那。薦福寺僧藏用。法準。慧通。千福寺僧飛錫。曇延。法崇。夏州靈覺寺僧潛真。滄州崇道寺僧慧通。奉恩寺僧慧端。東都龍興寺僧慧照。靈山。性如。廣福寺僧慧明。永寧寺僧智順。天竺寺僧談義。汴州相國寺僧惟秀。漢刃南陽寺僧道晏。成都府淨衆寺僧道遇。寶頂寺僧慧映。荊州慧日寺僧法珍。天長寺僧延秀。翠微寺僧道朗。大雲寺僧海明。資聖寺僧通由。慈恩寺僧法琳。金光明寺僧道猷。寶臺寺僧大辯。西明寺僧慧旰。崇福寺僧慧宗。如淨。慧月。青龍寺僧南嶠。勝業寺僧智銘。希湊。開闡。靈感寺僧覺超。醴泉寺僧慧澄。保壽寺僧慧崇。鳳翔府郿縣建法寺僧法敬。右大興善寺三藏沙門不空奏。前件寺是初置長安之日、將鎮帝國、首建斯寺。廊宇宏大、全用一坊、古來住持皆是名徳。比緣老宿淪沒僧衆凋殘。威儀軌則並是廢絶。況綿歴多載。臺殿荒涼、瞻言清規、實所歎惜。雖有後度、戒律未閑。復屬艱難、事資福祐。前件大徳四十九人、並道業清高、洞明經戒、衆所欽尚、堪為師範。伏乞隸名此寺、有闕續填。庶勦力匡持、葺理頽弊、永修香火、以福聖躬。其見任之綱維、望並依定。又緣寺之貧破、伏乞矜放諸雜差科。科得齊糧不絶報國行道。如天恩允許請

宣付所司。⁵⁾

とあり、安史の乱(七五五―七六三)が収束した翌年の広徳二年(七六四)、不空(七〇五―七七四)の推挙により、律儀が中絶していた大興善寺の四十九人の大徳の一人になったことが記されている。後述する円照(生没年不詳)の『貞元新定釈教目録』(通称『貞元録』)巻十六に、大興善寺の臨壇大徳として飛錫の他に乘如(生没年不詳)、如浄(生没年不詳)などの名が重複して挙がっていることから、ここでいう大徳とは主に臨壇大徳を指していると考えられる。⁶⁾

慧琳(七三七―八二〇)の『一切経音義』卷三十五には、

又至代宗文武皇帝廣徳二年甲辰歲、三藏大廣智不空於長安大興善寺、譯出佛頂尊勝念誦供養法一卷二十紙。沙門飛錫筆授。此第八譯也。⁷⁾

と記され、同年、不空が大興善寺翻經院において、『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』一卷二十紙を訳出するに当たって、筆授の役目を務めたとしている。

更に翌年の永泰元年(七六五)には、大明宮南桃園の内道場における『仁王護国般若波羅蜜多經』二卷及び『大乘密嚴經』三卷の訳出に翻經大徳として参与している。その詳細は、『請再訳仁王經制書』一首に、

右興善寺三藏沙門不空奏。伏以如來妙旨惠矜生靈。仁王寶經義崇護國。前代所譯、理未融通。潤色微言、事歸明聖。伏惟寶應元聖文武皇帝陛下、叡文啓運、濬哲乘時、弘闡真言、宣揚像教。皇風遠振、佛日再明。每為黎元俾開講、誦其仁王經。望依梵匣、再譯舊文、貝葉之言、永無漏略、金口所說、更益詳明。仍請僧懷感、飛錫、子翻、建宗、歸性、義嵩、道液、良賁、潛真、慧靈、法崇、超悟、慧

靜、圓寂、道林等、於内道場所翻譯。福資聖代、澤及含靈、寇濫永清、寰區允穆。傳之曠劫、救護實深。⁸⁾

と述べられ、また円照の『大唐貞元統開元釈教録』(通称『統開元録』)巻上に、

飛錫、(…中略…)。恩曰頒下。爰命京城義學大徳良賁等、翰林學士常袞等、於大明宮南桃園詳譯仁王、并校定密嚴等經。至四月十五日譯畢進上。⁹⁾

と記される通りである。また『貞元録』巻十五に、
大聖千福法花寺沙門飛錫、(…中略…)等並證義。¹⁰⁾
とあることから証義の役目を務めていたことがわかる。¹¹⁾

同時期に訳出された『大乘密嚴經』三巻に附されている『大唐新翻密嚴經序』は、代宗(七二六―七七九)の手によるものであり、その中で、
詔令集京城義學沙門飛錫等翰林學士柳抗等、詳譯斯文及護國經等。¹²⁾
と述べられ、京城義學沙門の代表として飛錫の名が最初に挙げられているのは特記すべきである。また『貞元録』巻十六には、

時大曆四年十二月十九日、(…中略…)。牒至准勅、故牒其虚空藏菩薩所問經。即代宗睿文武皇帝大曆年中當第五譯也。特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空、宣譯梵文。伏以三藏和上、學藝崇深、神儀秀逸。瑜伽三密、獨步南天。專精一乘、共推東夏。曉二方之世論尤善聲明。達五部之真言妙窮法印。奉詔翻譯、善得其真。然此經是法性、大乘文理照顯。傳譯雖久世未受持。若明珠繫於衣中金寶隱於室內。能發揮者其惟大師歟。前鄜坊防禦使兼御使中丞鄭國公杜冕。忠以奉主孝以寧親。重義輕財施封請譯。又請京城三學大徳同崇法

會。講論大德大安國寺上座沙門子鄭筆受。大興善寺上座沙門潛真潤文。臨壇大德西明寺上座沙門乘如證義。講論大德章敬寺上座沙門奉國。臨壇大德千福寺沙門飛錫。講論大德勝光沙門神曉、西明寺主沙門道液。西明寺都維那沙門歸性。臨壇大德大薦福寺沙門如淨。大興善寺主沙門圓敬等並同證義。譯語大德千福寺沙門法崇證梵文。兼譯大虚空藏菩薩念誦法一卷。再三詳校刊削繁蕪、函帙莊嚴光炫人目。¹³⁾ という記述があり、大曆四年(七六九)の内道場における『大集大虚空藏菩薩所問經』八卷及び『大虚空藏菩薩念誦法』一卷五紙の訳出時にも証義として関わったことが記される。なおここで拳がついている臨壇大徳の徳号は、大興善寺に設けられたものである。

(二) 不空滅後の飛錫

大曆九年(七七四)六月十五日、不空が没すると、その翌月には『大唐故大徳開府儀同三司試鴻臚卿肅国公大興善寺大広智三蔵和上之碑』¹⁴⁾ (史料)②を制作して不空の遺徳を偲んでいる。このころ千福寺安国寺両塔院の法華道場を檢校していたことが、その撰号(「檢校千福安国寺兩塔院法華道場沙門飛錫」)からわかる。

また同時期に『唐贈司空大興善寺大弁正広智不空三蔵和上影贊』一首(史料)③を撰述しており、この書の撰号に「灌頂弟子紫閣山草堂寺苾芻飛錫撰」とあることから、千福安国兩寺の法華道場では、大曆八年(七七三)に不空によって翻訳された『成就妙法蓮華經王瑜伽論觀智儀軌』(通称『法華儀軌』)一卷が用いられていた可能性がある。なお三崎良周によれば『法華儀軌』は純粹な翻訳とは言い難いという。そうする

と『法華儀軌』本文中に出る「法華三昧」「多宝塔」の語なども不空の言葉ということになり、飛錫との思想的連関性を考察する上でも重要である。¹⁴⁾

詳細な成立年代は不明だが、大曆十年(七七五)七月十八日以降、如願(七七五)の墓誌(史料)④を制作した。また『宋高僧伝』巻九「唐均州武当山慧忠伝」には、

譯經沙門飛錫、為碑紀徳焉。¹⁵⁾

と記されており、千福寺の慧忠(七七五)のためにも碑文を制作していたことがわかる。

大曆十二年(七七七)八月、止雨祈願の法要を営み、九月には『賀晴表』一首(史料)⑤を上表している。なお代宗が下した返答の書には、師緇門領袖、久在道場、勤結梵縁、福資黔庶。真聖所祐、宿陰漸開。宜益虔誠、慶流家國也。所賀知。¹⁶⁾

とあり、飛錫が仏門の領袖として久しく道場にあつたことがわかる。

大曆十三年(七七八)から建中元年(七八〇)にかけて、臨壇大徳十四人により進められた『勅僉定四分律疏』十巻撰述に関連して、興唐寺、温国寺の浄土院において、転経礼懺六時行道の法要が営まれた。

その詳細は、『続開元録』巻中の記述によって理解し得る。

(…上略)。其日品官楊崇一、宣奉勅語。興唐温國兩寺三綱、即與淨土禪院檢校僧等、嚴飾道場令道行。僧伍拾肆人、起今日一日、轉經禮懺六時行道、至來年二月一日散。設其齋糧香油茶藥一事已上、令所司祇供、宜各精誠問師等好在否。同日右銀臺門司趙夏日、宣牒奉勅語。尚食局索陸拾肆人、齋食果盤、并粥米生料一事已上自副。即

與大濟師計會、供送興唐温國兩寺淨土院。毎日各依。恒起今月二日供。至來年二月二日停。謹牒。是日也。僉定四分律疏大德十四人、恩命分赴兩寺道場、奉爲國家轉經行道。其月五日品官楊崇一、宣奉勅語。温國寺檢校大德飛錫、專知念誦大德曇邃等、好在否、檢校有勞也。宜加精誠轉念行道普爲蒼生。至十四年正月二十五日。品官楊崇一、又宣奉勅語。温國寺檢校臨壇大德曇邃飛錫等好在否。檢校有勞。其轉經及眞操律師誦經道場。宜延至二月十日散設齋。至二十八日。中使内給事李憲誠。宣奉勅語。温國寺轉念道場四分律臨壇大德等、釋門三學以心印相傳無上菩提。戒學以爲根本道場。畢日即宜赴大安國寺製造疏。成之後大道流行。至二月八日、品官楊崇一、宣奉勅語。大温國寺檢校道場大德曇邃飛錫等、其道場宜取十日散、設千僧齋。至十日散、設天使行香。大德五十四人、各絹三匹充嚮也¹⁷。

この際に飛錫は温國寺の臨壇大德として道場檢校の役に就き、大曆十四年(七七九)二月、『謝恩表』(擬題)一首(史料)⑥を陳謝のために上表した。これに対して代宗は、

師等。託跡緇流、修行妙教。所錫齋嚮、用廣勝因。所謝知¹⁸と勅答し、過日、大德五十四人に寄進した絹三匹の件について触れている。なお塚本善隆は、この官設法要において、『集諸經札懺儀』巻下所収の『六時礼讚偈』が用いられていたことを推測する¹⁹。

また鑑真(六八八―七六三)と共に來日した思託(生没年不詳)が、延暦七年(貞元四年)(七八八)に撰した『延暦僧録』第五「芸亭居士伝」にも飛錫に関する記述がある。

兼有三藏讚頌、附往大唐。唐内道場大德飛錫等禪侶、咸共嘆、訝毗

離耶有長者子、日本国亦有維摩詰。飛錫述念仏五更讚一卷、附來使。飾詞雅麗、人皆戴欽、再披再覽、令人發心。近士名播西唐、光揚日本、云々。文²⁰。

この史料に依れば、大明宮内道場において、遣唐使の訪問を受けた飛錫が、石上宅嗣(七二九―七八一)の『三藏讚頌』に感嘆し、『念仏五更讚』一卷を撰述して、一行に附したというのである。これについて王勇は「飛錫は唐内道場の僧侶たちの首領らしい存在であるので、これは時期は不空の円寂(七七四)以後であることを示唆している。日本の遣唐使年表によれば、大曆十二年(七七七)、第十六回遣唐使が入唐しており、『三藏讚頌』はこの時に送唐された可能性はかなり大きい」と述べ、時期を特定している。

『三藏讚頌』を著した石上宅嗣は天平宝字五年(上元二年)(七六一)、遣唐副使に任命されたが、その後解任され、この第十四回遣唐使自体も船舶破損により中止となっている(『統日本紀』巻二十四)。次に遣唐使の派遣が成立したのは、王勇の指摘する宝龜八年(大曆十二年)(七七七)の第十六回遣唐使であるが、石上宅嗣存命中(宝龜十年(大曆十四年)(七七九)にも第十七回遣唐使(送唐客使)が派遣されているため(『統日本紀』巻三十五)、時期を特定することは難しい。もし『三藏讚頌』が不空を讚えたものだとすれば、帰国した第十六回遣唐使から不空の入寂を伝え聞いた直後に、筆を執って第十七回遣唐使(送唐客使)に託したという仮説も成り立つが、現時点で『三藏讚頌』の内容が明らかではないので何とも言えない。

この史料には『念仏五更讚』について「飾詞雅麗、人皆戴欽、再披再

覽、令人発心」とあるのみで、『念仏五更讃』がいかなる内容であるか伺い知ることはできない。『宝王論』の思想とどのように対応するかは明確ではないが、大暦年間末頃までには念仏に関する思想が確立していたことは間違いないところであると思われる。またこの史料の信憑性に關しては、『延暦僧録』の著者、思託自身が師の鑑真と共に遣唐使船に乗り、来日した経験があることから信用に足るとみて良い。

貞元二十一年（永貞元年）（八〇五）七月二十五日、『千福寺多宝塔碑』の背面に飛錫撰の『唐国師千福寺多宝塔院故法華楚金禪師碑』（史料）^①が陰碑として刻入された。ただこれはあくまでも摸刻年代であり、また本文中に貞元十三年（七九七）、寶文場（生没年不詳）の奏請によって楚金へ諡号された大円禪師号についての言及がないことから、本文自体の成立は貞元十三年（七九七）以前、恐らく楚金の入寂後まもなくのことであったと考えられる。²³この碑文の摸刻年代をもって、飛錫の活動年代を貞元年間（七八五—八〇五）までと認めることはできず、生存の確認できる下限年代は、飛錫が『謝恩表』（擬題）一首を上奏し、勅答を受けた大暦十四年（七七九）二月に止めるべきである。

これ以後、飛錫の生存を確認できる史料は存在しない。それは大暦十四年（七七九）、代宗崩御に伴って即位した徳宗（七四二—八〇五）が仏教界を圧迫し始めた時期と重なっており、その事象と何らかの関係があると考えられる。

第三 『宝王論』の撰述年代

以上の考察を踏まえて飛錫の事跡年表を簡略に示す。

天宝三年（七四四）

千福寺法華道場において、楚金と共に法華三昧を修する。

乾元元年（七五八）

この頃、『唐国師千福寺多宝塔院故法華楚金禪師碑』を制作する。

広徳二年（七六四）

不空の推挙により大興善寺の臨壇大徳となる。同寺翻経院における『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』一卷の翻訳の際に、不空のもとで筆授の役目を務めた。

永泰元年（七六五）

大明宮南桃園の内道場における『仁王護国般若波羅蜜多経』二卷及び『大乗密厳経』三卷の訳出に証義として参与した。

大暦四年（七六九）

内道場における『大集大虚空蔵菩薩所問経』八卷及び『大虚空蔵菩薩念誦法』一卷の訳出時に証義として関わった。

大暦九年（七七四）

不空の寂後、『大唐故大徳開府儀同三司試鴻臚卿肅国公大興善寺大広智三蔵和上之碑』及び『唐贈司空大興善寺大弁正広智不空三蔵和上影賛』一首を制作した。この頃、千福安国両寺の法華道場を檢校していた。

大暦十年（七七五）

如願の墓誌、慧忠の碑文を制作した。

大暦十二年（七七七）

止雨祈願の法要を営み、『賀晴表』一首を上表。この年以降に『念
仏五更讃』撰述か。

大暦十三年(七七八)

『勅定四分律疏』十卷撰述に関連して、興唐温国兩寺の浄土院
において営まれた転経礼懺六時行道の法要を、温国寺臨壇大徳と
して検校した。

大暦十四年(七七九)

『謝恩表』(擬題)一首を上奏し、勅答を受けた。

飛錫の事跡を確認してみると、律儀、天台宗、密教、浄土教など多岐
に亘っていることがわかる。中でも不空の訳経場における翻訳活動が目
を引く。不空に見出されることによって、飛錫の活動の方向性は決定づ
けられたと言える。そして飛錫の手による史料の大多数が、大暦九年
(七七四)の不空入寂日から大暦十四年(七七九)に至る期間に成立し
ていることは特筆すべきである。『宝王論』もまたこの期間に撰述され
たと考えられるのである。『宝王論』「序文」には、

吾拱默九峯、與世異營。天書曲臨、自紫閣山草堂寺、令典千福法華
勝場、向三十年矣。希高扣寂、未有若君之所問者也。子將涉無生之
龍津、欲圖南以鵬舉、吾不敏也、嘗試論之。今則略開二十門、以明
斯旨耳。⁽²⁶⁾

と、撰述年代に関する決定的な記述が存在する。「天書」とは勅書のこと
とであり、「曲臨」とは勅命などに対して卑下する意で用いられる敬辞
のことである。⁽²⁶⁾すなわちここでは勅書により草堂寺から千福寺法華道場

に出向して大よそ三十年という時に当たったことが述べられているので
ある。⁽²⁷⁾『釈門正統』巻七の「飛錫伝」に、

勅住千福、法華幾三十載。⁽²⁸⁾

と記されているのは、明らかにこの記述を踏まえている。

次に千福寺に止住した年次については、『千福寺多宝塔碑』に、

自三載每春秋二時、集同行大徳四十九人、行法華三昧、尋奉恩旨、

許為恒式。(…中略…)同行禪師抱玉飛錫、襄衡台之祕躅、傳止觀

之精義。或名高帝選、或行密衆師。共弘開示之宗、盡契圓常之理。⁽²⁹⁾

とあるので、天寶三年(七四四)に皇帝へ恩旨を奉じて千福寺に止住し
たことがわかる。すなわち三十年という年が、飛錫が千福寺に入寺した
天寶三年(七四四)を指していることは明白である。そしてその三十年
後は、奇しくも不空の没年の大暦九年(七七四)と一致するのである。

この一致については以下の様に解釈することができる。中国仏教史
上、訳経家が自身の思想を体系化することは極めて稀であり、事実、師
の不空も訳経活動に専念して思索活動をほとんどおこなっていない。影
響下にあった飛錫も不空の生存中、それに倣って著述活動をおこなわな
かったであろうことが推測でき、著述活動の開始は、恐らくその死後の
ことだった可能性が高い。そのように考えるならば、『宝王論』は、不
空の入寂を契機に、活動の主軸を訳経活動から本格的な執筆活動へと移
行させた時期、すなわち思想家としての飛錫の円熟期であった大暦九年
(七七四)から大暦十四年(七七九)の間に撰述されたものだと想定で
きよう。

なお『宝王論』巻中において、

已上六門、盡是念現在阿彌陀佛、以通三世之意也。廣如安樂集、天台十疑論、咸法師釋群疑論、往生傳、稠禪師法寶義論所解、亦如飛錫先撰無上深妙禪門傳集法寶一卷廣明也。

と『宝王論』に先行する『無上深妙禪門伝集法宝』一卷なる著作の存在が示されている。現存しないため、明確な内容は窺い知れないが、『宝王論』巻上に、

瑜伽真言、深妙觀門、不謀而會^①。

と述べられているので、「無上深妙禪門」という語は、密教的な要素を有していることがわかる。したがって本書も『宝王論』に近接した時期に撰述された可能性がある。

おわりに

以上、『宝王論』の撰述年代を想定してみた。大暦九年(七七四)から大暦十四年(七七九)に想定することにより、『宝王論』の持つ多層的な思想的特徴に対して、一つの仮説を提唱することができる。それは長引く戦乱により、主として地方に個別化、分散化、多様化した仏教思想を統合しようとする働きが中央の仏教界の動向としてあり、その潮流を不空の入寂後、仏教界の領袖の一人となった飛錫が反映させて撰述したのが『宝王論』だったというものである。

安史の乱、またそれに付随する戦乱によって国土は大いに荒廃し、首都長安も天宝十五年(七五六)と広徳元年(七六三)に、二度、失陥の憂き目を見ている(『旧唐書』卷十一、卷二二五上)。この様に大規模な社会的事象は人々の価値観を多元化させずにはおれないものであり、仏

教思想もまたその影響を蒙ったと考えられよう。

安史の乱が唐代仏教の転換点であったことを物語る最も顕著な事例は禅宗の躍進である。事実、反乱を境として各地に禅宗の新旧諸派が次々と勃興、または展開している^②。『宝王論』がとる禅宗思想に対して肯定的である一面、批判的であるという一見矛盾した立場も、この仮説によって理解の一助となるかもしれない。どの様な種類の思想潮流であっても、それに対する反動が生じるのが常だからである。

また地方の仏教の状況に対する考察と同時に、中央の長安における同時代の思想家及び教団の動向、例えば法照、三階教徒たちとの思想的連関性をも考慮する必要がある。

安史の乱以後の代宗統治期という時間軸、また中央と地方という空間軸、それらの両観点から包括的に飛錫の思想に対する研究が進捗して初めて、『宝王論』の全容のみならず、唐代中期の仏教界全体の動向が理解され得るのではないだろうか。

【史料】

以下は飛錫の手によって成立したと考えられる史料群である。飛錫の行状を考察するに当たって、第一義的な史料に位置付けられる。

① 『唐国師千福寺多宝塔院故法華梵金禅師碑』

紫閣山草堂寺沙門飛錫撰

正議大夫行中書舍人翰林學士柱國東海男賜紫金魚袋吳通微書

潭碧千丈。無隱月容。松青萬嶺。莫靜風響。夫徳充於内而聲聞於天者。

有以見之於禪師矣。禪師法諱楚金。程氏之子。本廣平郡。今為京兆之盤屋人焉。祖宗閔閱。存而不論。母渤海高氏。夜夢諸佛。是生禪師。真可謂法王之子者也。行素顏玉。神和氣清。七歲諷花經。十八講花義。三十構多寶於千福。四十入帝夢於九重。上觀法名。下見金字。詰朝使問。罔不有孚。聲沸江海。豈惟京轂。於是傾玉帛。引金繩。千梁攢空。一塔聳漢。迴廊飛閣。無不創焉。風起而鈴鳴半天。珠懸而月生絕頂。清淨眼耳。駿奔香花。度如恒沙。而無所度者有之矣。嘗於翠微悟真。捫蘿靈趾。乃曰。此吾棲遁之所。遂奏兩寺。各建一塔。咸以多寶為名。度緇衣在白雲。昭其靜也。矧夫心同琉璃。思出常境。工人梓匠。僉訝生知。毘首所未悟。班輪所愕視。若然。則浮圖之化。髻珠之教。風靡千界。皆禪師之力。豈止金丹五天而已哉。禪師雲雷發空谷之響。金石吐鏗鏘之音。吟詠妙經。六千餘篇。寶樹之下。髣髴見於分身。靈山之上。依稀覲於三變。心無所得。舌流甘露。瑞鳥金碧。棲於手中。天樂清冷。奏於空際。凡諸休應。皆不有之。乃曰。法本無名。焉有彼相。長而不宰。其在茲焉。若非法華三昧。稟正衡陽。止觀一門。傳乎台嶺。安能迂象王之法駕。迴聖主之宸睞。承明三人。宏道六宮。后妃長跪於御筵。天花每散而不著。玄宗題額。肅宗賜幡。鵲返雲中。住香樓而不下。龍蟠天上。挂金刹而常飛。玉衣盈箱。璽書滿篋。寫千經滴瀝而垂露。答萬乘渙汗之渥澤。夔龍貂冕。下黃道而整襟。隱逸高僧。入青蓮而扣寂。微塵知識。如從百城而至。無邊勝士。若自千華而來。豈榮冠於一時。亦庶幾於佛在也。雖林茂鳥歸。人高物向。澄潭天地之境。委曲虛空之姿。無來乃來。不往而往。所作已訖。吾將去乎。有夢綵座前迎。諸天獻菓。粵以乾元二年七月

七日子時。右脇薪盡火滅。雪顏如在。昭乎上生於安養之國矣。享齡六十二。法臘三十七。天子憫焉。中使弔焉。尋勅驃騎大將軍朱光暉監護。即以其年八月十二日。法葬於長安城西龍道原法華蘭若塔之□禮也。於戲。禪師齡年詔度。初配龍輿。中歲觀心。閉關千福。罷玉柄葆天光。悟炎宅清涼。駕一乘獨運。乃夢塔從地湧。因用模焉。今之所製。抑有由矣。至若神光熠耀於其顛。聖燈明滅於其下。晝普賢則舍利飛筆。繪羣釋乃卿雲澹空。頂中之血。刺寫經王。衣裏之珠。指呈醉士。當其無。有其用。不立心境。同乎大通。彼五色之相宣。我摩尼之何有。豁如也。縑纈皮革。多由損生。屬徒衣布。寒如艾納。慈至也。若乃降龍之鉢。解虎之杖。蓮花之衣。甘露之飯。凡諸法物。率多勅賜。不住於相。咸將施焉。室不貯於金錢。堂每流乎香積。澹然閑住。為天人師。允所謂利見於大雄。釋門之亞聖者也。又曰。吾自知終於六十有二矣。爾曹誌之。以其言。驗其實。宛如也。噫。八部增怛。萬國同哀。有詔令茶毘。遵天竺故事。於是金棺閉。香木燒。玉兔馴。白鶴唳。霧咽松檟。風淒郊垌。月飛青天。無照元夜。法花弟子當院比丘慧空法岸浩然等。表妹萬善寺上座契元萬善寺建多寶塔比丘尼正覺資敬寺建法華塔比丘尼奔叱利等。真白凡數萬人。悲化城之不住。痛寶所而長住。貝葉翻手。孰指宗通。金磬發林。誰宣了義。以予分座御榻。同習天台。爰託斯文。鏤之真石。式揚真古。敢不銘云。

天上雲飄 海中日出 如何落照 大明奄失
蓮花之外 別有蓮花 寥廓之表 又逢寥廓
法離去來 道無今昨 松門一塔 誰為寂寞
寂而常照 死而不亡 其響彌高 兮其德彌彰

白鶴雙飛 飛香郁郁 明月既出 更無星宿

(建塔國師奉。勅追諡號記。以貞元十三年四月十三日。左街功德使開府鄆國公寶文場。奏千福寺先師楚金是臣和尚。於天寶初。為國建多寶塔。置法華道場。經今六十餘紀。僧等六時禮念經聲不斷。以歷四朝未蒙旌德伏乞。聖慈特加諡號以廣前修奉。勅宣賜諡曰。大圓禪師中書門下准。勅施行者今合院梵侶敬承恩旨。頂奉修持用資。皇壽將恐代隔時遷真縱靡固轍。刊碑末以紀芳猷遠追鸞嶺之風聿光不朽之跡。

貞元廿一年歲在乙酉七月戊辰朔廿五日壬辰建。廣平宋液摸刻⁽³⁵⁾

②『大唐故大德開府儀同三司試鴻臚卿肅國公大興善寺大弘智三藏和上之碑』

勅檢按千福安國兩塔院法華道場沙門飛錫撰

一月飛空。萬流不閤。五天垂象。三藏降生。曷其謂焉。我大師矣。大師法諱不空。北天竺婆羅門子也。初母氏遇相者曰。爾汝必當生菩提薩埵也。已便失。數日之後。果夢佛微笑眼光灌頂。既寤猶覺。室明如晝。因而孕焉。早喪所天。十歲隨舅氏至武威郡。十三遊太原府。尋入長安。以求出要。見大弘教金剛三藏以為真吾師。初試教悉曇章。令誦梵經。梵言賒切。一聞無墜。便許入壇。授發菩提心戒。年甫十五與出家焉。弱冠從有部進具成大苾芻。律相洞閑。知而不住。將欲學聲明論窮瑜伽宗。以白先師。師未之許。夜夢佛菩薩像悉皆來行。乃曰。我之所夢法藏有付矣。遂授以三密。談於五智。十二年功六月而就。至開元二十九年秋。先師厭代入塔之後。有詔令齋國信使師子

國。白波連山。巨鱗橫海。洪濤洶湧。猛風振激。凡諸難起。奮金剛杵。諷隨求章。辟災靜然。船達彼國矣。弟子僧舍光慧辯皆目擊焉。師子國王郊迎宮中七日供養。以真金器沐浴大師。肘步問安以存梵禮。王諸眷屬宰輔大臣備盡虔敬。其國有普賢阿遮梨聖者。位階聖地。德為時尊。從而問津。無展乃誠。奉獻金貝寶曰。吾所寶者心也。非此寶也。尋即授以十八會金剛頂瑜伽并毘盧遮那大悲胎藏五部灌頂真言秘典經論梵夾五百餘部。僉以為得其所傳也。他日王作調象戲以試大師。大師結佛眼印。住慈心定。誦真言門以却之。其象顛仆不能前進。王甚敬異。與夫指降醉象有何殊哉。則知七葉之花本無香氣。五陰之舍豈有我人。三摩地中示其能慧。至天寶六載。自師子國還。玄宗延入建壇。親授灌頂。住淨影寺。于時愆亢納慮於隍。大師結壇應期。油雲四起。霑然洪湧。遂內出寶箱。賜紫袈裟一副絹二百匹。以旌神用。或大風拔樹之災。妖星失度之沴。舉心默念如影響焉。至十三載。有勅令往武威走節度使哥舒翰請。立大道場。與梵僧舍光并俗弟子開府應李元琮等授五部灌頂金剛界大曼荼羅法。時道場地為之大動。有業障者散花不下。上著子蓋。猶如群蜂味之香藥。不能却之。事訖方墜。何神之若此耶。十桂紫眼月勅還京住大興善寺。洎至德中。肅宗皇帝行在靈武。大師密進不動尊八方神旗經。并定收京之日如符印焉。乾元中。延入內殿建護摩。親授灌頂。渥恩荐至。有殊恒禮。尋令於智炬寺念誦。感本尊玉毫劃然大明照徹巖谷。及我寶應臨朝金輪馭歷。聖膝彌積。師事道尊。授特進試鴻臚卿。加大廣智之號。躬稟秘妙。吉祥至止。或普賢瀉神光於紫殿。六宮作禮。或文殊呈瑞相於金閣。萬乘修崇。或翻密嚴護國之梵文。雲飛五色。或譯虛空庫藏之貝偈。

霧擁千僧。大師銜命而陟彼清涼。承恩而旋歸帝邑。凡諸應驗。差難備陳。方悟夫虛空之花體無生滅。真如之用豈有去來。前後奉詔所譯諸經總八十三部計一百二十卷。並已頒行入藏目錄。兼奏天下諸寺以文殊為上座。仍置院立像。保釐國界。申殷敬焉。至大曆八年。有進止於興善本院又造文殊金閣。禁財內出。工人子來。寶傘自九霄而懸。御香亦一人所錫。微塵之衆如從地涌。鈞天之樂若在空中。至九年六月十一日。制加大師開府儀同三司。封肅國公。食邑三千戶。餘如故。榮問優洽。寵光便繁。降北極之尊為師宗之禮。幡像之惠。玉帛之施。勅書盈篋。中使相望。前古已來未有如我皇之清信也。吾師之丹誠也。大師爰自二十歲迄于從心五十餘年。每日四時道場念誦。上升御殿。下至凡榻。剎那之頃曾無間焉。萬嶺寒松歷嚴霜而黛色者。有以見之於直操矣。矧夫入朱門如華戶。五載三若羈衣。雖馳于麒麟。常在九禪之清淨。獨立不及。同夫大通衆色摩尼本無定彩。彩止自彼。於我何為。寔謂真言之玄匠。法王之大寶者也。於戲菩薩應見成不住心。如來堅林度有情輩。示以微疾。自知去辰。以其月十五日爰命弟子進表上辭。囑以後事。削髮湯沐。右脇累足。泊焉薨逝。春秋七十。法臘五十。時驟雨滂注。小方天開。哀悼九重。輟朝三日。贈絹三百匹布二百端錢三十萬米麵共四百石香油薪炭及諸齋七外支給。又賜錢二百二十五萬。建以靈塔。寓內式瞻。又勅高品李憲誠勾當及功德使開府儀同三司李元琮監護。即以七月六日法葬于鳳之南少陵原。其日中書門下勅牒贈司空。諡大辨正廣智不空三藏和上。又遣內給事劉仙鶴。宣冊致祭。內出香木。焚之靈棺。具荼毘之禮也。寺池涵而華萎者告終之象。夢幢傾而閣倒者驚誠之期。則雙林變白之徵。洞水逆流

之感。豈昔時也。宰臣百辟曾受法印者罔不哀慟。門人勅常修功德使檢校殿中監大興善寺沙門大濟等四部弟子凡數萬人。痛大夜之還昏悲慧燈之永滅。不以才拙令紀芳猷。飛錫謬接羅什之筵。叨承秦帝之會想高柴之泣哭。盡同奢花之血見。式揚無說之說。以頌龍中之龍。其詞曰。

文字解說即真言兮 天生我師貝葉翻兮

龍宮闔闔了本源兮 象駕透池仙樂繁兮

所作已辦吾將滅兮 空留梵夾與花鬘兮

冕旒增悼合會葬兮 人慟地振聲何誼兮

金剛之杵夢西土兮 以表吾師安養國兮

法王之子驚牛軒兮 永度生死破魔怨兮

大曆九年歲甲寅七月六日丁酉建²⁶

③『唐贈司空大興善寺大弁正広智不空三藏和上影贊』一首

灌頂弟子紫閣山草堂寺苾芻飛錫撰并書

天子灌頂 阿遮梨耶 道傳上國 家本耆闍

其望如龍 其人如玉 貝多在手 梵字攸矚

心同皓月 光映碧池 蟬蛻而去 麟臺畫之

三密寂寥 九重哀悼 筋簫駟馬 皆承明詔

萬里雲慘 千山松悲 蒼蒼何忍 奪我宗師

瞻雪顏則 無示無說 傳浩浩劫 斯焉取斯²⁷

④『大唐真化寺多宝塔院故寺主臨壇大德尼如願律師墓誌銘』

勅檢按千福寺法華道場沙門飛錫

大曆十年歲次乙卯五月廿九日。律師薨於長安真化寺之本院。律師法諱如願。俗姓李氏。隴西人也。申公之裔。簪裾之盛。真豈寶乎。律師天生道牙。自然神秀。十一詔度。二十具圓。彌沙塞律。其所務也。分甍之義不殊。折金之理斯在。律師僅登十臘。聲實兩高。邀臨香壇。辭不見允。望之儼然。即之溫然。其慧也月照千潭。其操也松寒萬嶺。乃曰。威儀三千。吾鏡之矣。度門八萬。復焉在哉。遂習以羅浮雙峯無生之觀。位居元匠矣。我皇帝纂聖君臨。千佛付囑貴妃獨孤氏。葛覃蘊德。十亂匡時。愛道紫宸。登壇黃屋。因賜律師紫袈裟一副。前後所錫錦綺繪帛。凡數千匹疋。以旌其高。際乎盈庭。了無是相。道何深也。由此勅書豐篋。中使相望。御馬每下於雲霄。天花屢點於玉砌。締構多寶塔。繕寫蓮華經。環廊繚緝。金利熠耀。額題御札。光赫宇宙。皆吾君之特建。亦貴妃之為國。宏哉。噫。律師擲鉢他方。應遽還於靜室。散花上境。何便住於香天。顏貌如生。若在深定。曲肱右脇。湛然已滅。春秋七十六。法夏五十六。具以上聞。皇情憫焉。中使臨弔。賻贈之禮。有加常等。律師累聖欽若。三都取則。意澹江海。心閑虛空。而今而後。恐難繼美。於戲。六宮誰授其髻寶。八部孰示於衣珠。覺路醒而羣迷。人花茂而還落。哀哉。弟子長樂公主與當院嗣法門人登壇十大德尼常真勅賜弟子證道政定證果寺大德凝照惠照凝寂悟真資敬寺上座洪演寺主孝因律師真一遠塵法雲寺律師遍照等。凡數千人。則懿戚相門。愛道花色。而為上首。忽喪宗匠。如觀鶴林。即以其年七月十八日。奉勅法葬於長安城南畢原塔之□禮也。素幡悽於

道路。丹旌慘於郊局。式揚國師。敢為銘曰。

紫袈裟者彼何人 已了如來清淨身

登壇不向明光殿 去去應超生死律

隴西秦臯書。廣平程用之刻字³⁸

⑤『賀晴表』一首

沙門飛錫等言。伏奉八月二十六日中使高品李憲誠宣。聖旨。令京城諸寺釋門衆轉大般若孔雀王等經。精勤止雨。用副聖心者。飛錫聞。帝堯至聖不無水雨之多。大雲寶經亦有請止之化。頃者稍如霖霖。納慮於隍陛下親露心於金人。每焚香於玉殿。遂使晴光上升折重雲而四照。惠風旁振掃氛霧於八方。棗盛可期。倉庾恒溢。斯皆天慈精詣。僧等何知。凡在道俗無任感戴。謹附中使李憲奉表陳賀以聞。沙門飛錫等誠歡誠躍謹言。大曆十二年九月一日、京城釋門衆沙門飛錫上表。³⁹

⑥『謝恩表』(擬題)一首

沙門飛錫等言。飛錫聞金輪騰翥。以十善化人。大聖用心。以蒼生為念。伏惟陛下。洞入微妙明德惟馨。宣詔命於祇園。徵龍象於溫國。隨年五十四轉經千萬偈。作禮金殿。清齋玉堂。或升座諷甘露之文。或旋繞動蓮花之步。大濟禪師每親法會執鑪虔懇。僧等沐浴聖化。奉答皇恩。更蒙天慈寵光法侶。御香玉帛。列於梵宮。寶饌金錢。霧下於淨土。無任戴荷殊常之至。謹附中使楊崇一。奉表陳謝以聞。沙門飛錫等誠歡誠慶謹言。⁴⁰

〔注〕

- (1) 版本は、国内で刊行されたものに、①「慶安元年版」(佛敎大学蔵、執筆者蔵)、②「元禄十三年版」(佛敎大学蔵)、③「享保六年版」(佛敎大学蔵)、④「安永三年版」(浄土十要)所収(佛敎大学蔵)などがある。
- 大陸で刊行されたものには、①「嘉興蔵版」(浄土三論)所収、②「乾隆四十九年版」(浄土津梁)所収(中国国家図書館蔵)、③「光緒二十年版」(浄土十要)所収(中国国家図書館蔵、佛敎大学蔵)、④「北京刻経処版」(中国佛学院蔵)などがある。「嘉興蔵版」収録テキストの開版年代は、紹武元年(一六四六)であり、「慶安元年版」に先立つテキストである。また写本には「禪林図書館蔵本」(鎌倉期)がある。
- (2) 宮崎市定『アジア史概説』一六一―一六二頁(学生社、一九七三年、初出は一九四七年)。
- (3) 『宋高僧伝』卷三(『大正蔵』第五〇卷、七二二下)。瑞拱元年(九八八)謹上の『宋高僧伝』は、唐代仏敎の研究に際して第一級の史料と成り得るが、史料の信憑性についての検討が不十分な点もある。陳垣『中国仏敎史籍概論』三四―四三頁(科学出版社、一九五五年)。なお「飛錫伝」の末尾(「系曰」以下)には、贊寧の論断が載せられている。この飛錫についての論断はあくまでも贊寧の主観で述べられたものであり、参照には留意が必要である。例えばここに出る人名は、儒墨思想などの観点から比較のために論じられたもので、飛錫と直接交流があったことを、必ずしも示している訳ではない。
- (4) 『千福寺多宝塔碑』近拓(執筆者蔵)。この多宝塔碑(岑助撰、顔真卿書)は、西安の碑林博物館(第二室)に現存している。高島槐安旧蔵の宋拓などが著名。常盤大定、関野貞『支那仏敎史蹟』一(支那仏敎史蹟研究会、一九二五年)の「評解」や『全唐文新編』(吉林文史出版社)において翻刻がなされている。
- (5) 『不空三蔵表制集』卷一(『大正蔵』第五二卷、八三〇上―八三二上)。以下、「青蓮院本」などを適宜参照。
- (6) 永泰年間(七六五―七六六年)、大興善寺に方等戒壇が設置されたこととの関連が指摘できる。臨壇大徳の徳号はこれより始まるという(『大僧宋史略』卷下)。なお臨壇大徳の乗如と方等戒壇を関連づける碑文が複数ある。また岩崎日出男によれば臨壇大徳、翻経大徳、講論大徳を三学大徳と総称するという。『唐大興善寺故大弘敎大弁正三蔵和尚影堂碣銘并序』について―その史料的付付けと価値を中心として―四〇頁(『東洋の思想と宗教』第二二号、早稲田大学東洋哲学会、二〇〇四年)。
- (7) 『一切経音義』卷三十五(『高麗大蔵経(再雕本)』第四二卷、七五九上)。卷百には『宝王論』の語句の切韻註釈がある。これは他書に現れる『宝王論』引用の最初の例である。『宝王論』校訂の際には用いられるべきであろう。
- (8) 『不空三蔵表制集』卷一(『大正蔵』第五二卷、八三一中―下)。
- (9) 『大唐貞元統開元釈教録』卷上(『中華大蔵経』第六五冊、一八七下―一八八上)。
- (10) 『貞元新定釈教目録』卷十五(『大正蔵』第五五卷、八八四下)。
- (11) 大村西崖の『密敎發達志』卷四(『仏書刊行会図像部』一九三二)では、「古写仁王経後記」を典拠として挙げる。卷末(「訳場列位」)に、「翻経大徳大聖千福法華寺沙門飛錫、証義」とある。「法隆寺一切経」古写本がこれに該当するのだろうか。友永植「不空訳「仁王護国般若波羅蜜多経」小考」十八頁(『別府大学紀要』第三五号、別府大学会、一九九四年)。
- (12) 『大唐新翻密蔵経序』(『大正蔵』第十六卷、七四七中―下)。他に「金剛寺本」などを参照。
- (13) 『貞元新定釈教目録』卷十六(『大正蔵』第五五卷、八八七中―八八八上)。
- (14) 三崎良周「成就妙法蓮華経王瑜伽論観智儀軌について」十九頁(『東洋学術研究』第十四卷、六号「七五」、東洋哲学研究所、一九七五)。
- (15) 『宋高僧伝』卷九(『大正蔵』第五〇卷、七六三中)。「入唐新求聖教目録」(『大正蔵』第五五卷、一〇八四上)には「紫閣山莫碑一卷、沙門

飛錫撰」とあり、他にも碑文を制作していたことがわかる。なお金澤邦夫は拓本伝来の初期の例の可能性を指摘している。また『宋史』卷二〇五「芸文志」四には、「飛錫、往生浄土伝五卷」とあり、『往生浄土伝』五卷という往生伝の存在が示されている。採録された僧名などは不明。

(16) 『不空三藏表制集』卷五(『大正藏』第五二卷、八五四中)。

(17) 『大唐貞元統開元釈教録』卷中(『中華大藏經』第六五冊、二〇八上下)。

(18) 『大唐貞元統開元釈教録』卷中(『中華大藏經』第六五冊、二〇八下、二〇九上)。

(19) 塚本善隆『唐中期の浄土教―特に法照禪師の研究―』一八五―一八八頁(『東方文化学院京都研究所研究報告』第四冊、東方文化学院京都研究所、一九三三年)。塚本善隆は飛錫を浄土教家と見做し、また円珍(八一四―八九一)の『福州温州台州求得経律論疏記外書等目錄』に、「暫往生浄土文」巻、南岳飛錫作」と註されているのを典拠として、南岳における天台教的浄土教の修学経験を指摘している(三〇三―三〇四頁)。

(20) 『日本高僧伝要文抄』卷三。藏中しのぶ『延暦僧録』注釈二七八―二七九頁(大東文化大学東洋研究所、二〇〇八年)。

(21) 王勇「遣唐使与日本典籍的輸出」一八八―二〇八頁(王勇、大庭脩編『中日文化交流史大系九 典籍』浙江人民出版社、一九九六年)。

(22) 石井義長は、空也(九〇三―九七二)の『宝王論』受容を指摘すると共に、『念仏五更讚』の内容についても「六時念仏の第五、日の出の午前六時頃の晨朝時の念仏を指すと考えられる」と推測している。

『空也―我が国の念仏の祖師と申すべし―』(『ミネルヴァ日本評伝選』、ミネルヴァ書房、二〇〇九年)四二―四四頁。或いは五更転のものか。『唐国師千福寺多宝塔院故法華楚金禪師碑』拓本(支那仏教史蹟研究会蔵版。現在、東北大学蔵)の影印を参照(常盤大定、関野貞『前掲書』)。この碑陰は西安の碑林博物館(第二室)に現存。書は呉通微(生没年不詳)。なお寶文場は貞元年間(七八五―八〇五)の訳経にも関つ

ている(『訳場列位』)。

(24) 山崎宏『隋唐仏教史の研究』二四九頁(法蔵館、一九六七年)。藤善眞澄『隋唐時代の仏教と社会』一九六―二〇五頁(白帝社、二〇〇四年)。徳宗が仏教界への締付を緩めるのは、貞元元年(七八五)以降である(ペリオ本二一三〇)。

(25) 『念仏三昧宝王論』上(嘉興蔵版)一丁表)。

(26) 『佩文韻府』、『漢語大詞典』参照。唐中期仏教思想研究会は、「天書曲臨」を「天書でさえも満足に見ておりません」と訳している。「唐代中期仏教の研究」八一―八五頁(『大正大学綜合佛敎研究所年報』第二三号、大正大学綜合佛敎研究所、二〇〇一年)。なお二〇〇九年にわたる研究成果を『念仏三昧宝王論の研究』(『大正大学綜合佛敎研究所叢書』第二二卷、ノンブル社)として刊行。「解題」、「資料篇」、「研究篇」(論文集)からなり、「資料篇」においては、国内で刊行された諸版本、活字本をもとに校合作業がなされている。

(27) 「向」には、「接近する、向かう」などの意味の他にも、副詞的用法としての「大よそ」、「今しがた」の意味もある(『漢語大字典』二四四頁、『文言文虚詞大詞典』二二〇頁)。

(28) 『釈門正統』卷七(『中新纂統藏經』第七五卷、三四六下)。

(29) 『千福寺多宝塔碑』近拓(執筆者蔵)。

(30) 『念仏三昧宝王論』卷中(嘉興蔵版)十四丁表)。

(31) 『念仏三昧宝王論』卷上(嘉興蔵版)十丁裏)。

(32) 小林順彦「不空門下としての飛錫の立場」一一九―二〇頁(『佛敎文化学会紀要』第十六号、二〇〇八年)。

(33) 小川隆「神会―敦煌文献と初期の禪宗史―」一六五―一六七頁(『唐代の禪僧』第二卷、臨川書店、二〇〇七年)。北宗、浄衆宗、保唐宗、洪州宗、牛頭宗、南山念仏門、荷沢宗などの新旧七宗の名が挙がっている。

(34) なお伊吹敦は『宝王論』に見られる禪宗批判の記述の中に、北宗の他に荷沢宗を対象としたものが散見できることを指摘している。「念仏三昧宝王論に見る禪の動向」一一二―一四三頁(『東洋学研究』第

- 四一号、東洋大学東洋学研究所、二〇〇四年)。
- (35) 『唐国師千福寺多宝塔院故法華梵金禪師碑』拓本の影印を参照(常盤大定、関野貞『前掲書』)。また同書の「評解」や『全唐文新編』(吉林文史出版社)において翻刻がなされている。碑文末尾に梵金が法華道場を設けてから「六十余紀」を経るとあるので、「建塔国師奉」以下は貞元二十一年(八〇五)の摸刻時に成立したことがわかる(飛錫の関与は不明)。なお『歴代名画記』にも関連記事が複数ある。
- (36) 『不空三蔵表制集』巻四(『大正蔵』第五二卷、八四八中〜八四九下)所収。
- (37) 『不空三蔵表制集』巻四(『大正蔵』第五二卷、八五九下)所収。
- (38) 『大唐真化寺多宝塔院故寺主臨壇大德尼如願律師募誌銘』(周紹良主编『唐代募誌彙編』下、上海古籍出版社、一九九二年、一七八六〜一七八七頁所収)。底本は周紹良蔵の拓本。『隋唐五代募誌匯編』(天津古籍出版社)や『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』(中州古籍出版社)などで拓本の影印が確認できる(北京図書館蔵本は近拓)。如願律師については、『金石萃文』巻百に「宗室の女」とある。
- (39) 『不空三蔵表制集』巻五(『大正蔵』第五二卷、八五四下)所収。
- (40) 『大唐貞元統開元釈教録』巻中(『中華大蔵経』第六五冊、二〇八下)所収。

(かとう ひろたか 文学研究科浄土学専攻博士後期課程)

(指導・藤堂 俊英 教授)

二〇一〇年九月三十日受理